

【厚生労働大臣賞…小学生の部】

「弟の见えている世界」

福島県・須賀川市立西袋第一小学校

6年 大石 悠叶さん

僕の弟は生まれつき珍しい染色体異常を持っている。数万人に一人の確率で生まれてきた弟は、最初の半年間泣いてばかりでミルクも上手に飲めず、ひどくやせていた。僕の両親も一生懸命頑張っていたのを覚えている。上手く成長出来ない原因が障害の為だと分かってから、家の中のピリピリした雰囲気になくなり、僕の予想とは反対に温かい空気変わった。これからますます大変になると思われた生活に、母は弟のペースに合わせてのんびり子育て出来るからせいたくだという意外な言葉が返ってきて、僕は正直おどろいた。

三歳になる弟はまだ自分一人で歩く事も会話する事も出来ない。しかし、家族の行動をよく見ている。弟にとって母は食事や身の回りの世話をしてくれる人、父はお風呂や寝かしつけをしてくれる人、僕は遊んでくれる人なのだ。自分の欲求を叶えてくれる人の所に伝い歩きをして、表情や声の変化で伝えてくる。正確には分からなくても僕達家族はそれと

なく理解して弟の欲求に応えている。その様な生活は三年以上続いているが、父も母も不便とも思われる生活をむしろ楽しんでる様に見える。僕は弟の中で遊び相手担当だが、弟の興味はころころ変わるので、時々弟の面倒を見るのが大変だ。

「想ちゃんの目はいつでも望遠鏡だよ。」と父が教えてくれた。弟の場合は普通の人と違って興味の視野が狭く、例えたと望遠鏡から物事をのぞき込む位の小さい範囲でしか見えないそう。だから弟の関心事がその望遠鏡の见えている範囲から出ると、無関心になって遊びが続かないのだと初めて知った。この事をきっかけに僕は遊びだけでなく、弟の生活のお手伝いを進んでする様になった。弟は毎週病院や支援施設で、歩く練習や食べる練習もしている。両親以外にも、様々な人達のサポートを受けて毎日を笑顔で過ごしている。弟は幸せ者だ。他から見れば不便な生活も不幸ではないのだ。僕は弟の遊び担当者として沢山の興味や関心を持てるように根気良く教えてあげようと思う。また、夕食やお風呂の準備で忙しい母に代わって、気付いた所からお手伝いをして、自分自身の時間の使い方も見直そうと思う。僕と弟の時間の流れ方は違うが、遊びを通じて弟の见えている毎日の生活に少しずつ出来る事の種をまき、大事にゆっくり育てていくお手伝いをしたと思う。

僕の弟はいつもニコニコして表情が豊かだ。幼稚園や支援

施設、病院でも皆が弟の周りに集まって、遊んだり手伝ってくれたりの関わりがあるそうだ。僕の予想以上に弟の生活は楽しく明るく過ごしている。僕達は家族でありチームだ。僕にしか出来ないサポートをして可愛い弟をずっと支えていきたい。